

---

IS **インフィニット・ストラトス** ~黒風の騎士~

いつき

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

IS インフィニット・ストラトス ～黒風の騎士～

### 【Nコード】

N2234S

### 【作者名】

いつき

### 【あらすじ】

IS・・・正式名称『インフィニット・ストラトス』。

それは本来女性にしか動かすことが出来ない代物なのだが・・・？

これは世界でISを動かすことができる二人の男の物語である・・・

序章・始まりの風（前書き）

## 序章：始まりの風

「・・・漸く、着いた・・・」

某国の山奥にあるとある建物を見上げてポストンバックを担いでいるオレはそう言った

建物の玄関の横に認証式パスワードを打ち込む所がある

オレは教えられた通りに計24桁のパスワードを打ち込んだ

すると今度は指紋認証が行われる

オレはその下にある指紋認証のところに手を置いた

そして最後には声帯認証まであるんだ

ってか・・・

「毎回来る度に思うんだが・・・どれだけ嚴重なんですかこの防犯は!？」

それだけ言つと『声帯認証確認しました』つて音声 flowed・・・  
つて

「こんなんでいいのかよ!？」

本当凄いのか凄くないのか・・・

まあとりあえずこれで入れるからいいか

オレは何とも言えない気持ちで建物の中に入って行った

中に入ってから数分後、オレは研究所・・・と言っか、格納庫って  
言った方がいいのかもな。まあそんな所にいた

「おー私の嫁よ、久しぶり〜」

「・・・オレは何時貴女の嫁になった？つかなるなら寧ろ婿の方で  
しよ」

呆れ混じりな表情で、後ろから抱きついてきた女性・・・篠ノ之束  
さんにそう言った

「にゃはは〜、相変わらず照れ屋さんだな〜しいくんは」

しいくん、まあオレ、神崎シオンの事だな

さて、知ってる人もいるかと思うが、紹介しよう

篠ノ之束さん、白衣を着ていてそして何故かうせ耳つけている美人  
な人

そしてグラマーである

・・・まあ今のは見た感じの説明であって、ここからが本題だ

嘗てISを考案し、開発した張本人、産みの親と言ってもいい

んで468機のISを造って以来、製造を取りやめ、今現在世界規模で隠れ鬼ごっこをしている

まあ要するに、だ

ISの殆どがブラックボックスと化としていて、それが分かるのはここにいる束さんただ1人、国はこの人を捕まえて情報を聞き出すとして

なので『そんなの捕まるかよバーカ』と言って現在逃走中・・・という訳だ

では束さんが造った『IS』とはなんなのか・・・

IS、正式名称『インフィニット・ストラトス』。宇宙進出の為に開発された、マルチフォーム・スーツと言うのが開発のコンセプトだったらしい。

開発当初はあまり注目されなかったのだが、ここにいる束さんともう一人が起こした「白騎士事件」によって従来の兵器を凌駕する圧倒的な性能を見せつけたことから、宇宙進出よりも飛行パワード・スーツとして軍事転用されることになった

ってか・・・

「抱きつくの止めません？オレも色々辛いので」

オレも健全な青少年である

流石にこう・・・ねえ？理性的に辛いのですよ

「よいではないか〜よいではないか〜」

そう言いながら豊満な二つの物を押し付けてくる東さん

・・・確信犯が

「それより、頼んでいた物は？」

「もうとっくの昔に出来てるよ〜、その証拠に右を〜ご覧ください〜」

右？

オレは首を右に捻った



束さんはオレから離れると、ポケットに手を突っ込んで何かのリモコンを取り出した

「あそれポチつとな」

そう言つてスイッチを押すと壁が左右に割れて中からある物が出てきた

「いや〜大変だったよ、いきなり来てみれば『黒騎士の修理をお願いします』だもん」

黒騎士・・・オレ専用機のISだ

・・・えっ？

ISは女性にしか動かせないんだろって？

まあ普通ならそうだ

だけどオレともう1人男でISを動かせる奴が今IS学園にいるんだが、オレ達は特異点・・・まあ通常じゃ有り得ない事を成せる者、とでも言えはいいか？とりあえずはそういう事だ

「・・・すみません、美味しい手料理を作らせて頂きますので、そ

れで勘弁してください」

「……それともう一つ条件を認めてもらえればいいよ？」

「……まあいいか。無理言っつてやってもらっただし

「それで何をしたいんですか？」

「……ぎゅっつてして欲しいな／＼」

あれ？急に顔が赤くなったけど……大丈夫……へっ？

「ぎゅっつと、ですか？」

赤らめた顔で束さんは頷いた

「……どうしよう、いつもの束さんならこんな事言わないはずなんだけど……」

オレは束さんに近付いて優しく、且つ力強くぎゅっつと抱き締めた

「んっ……しーくんは暖かいね。安心出来るよ……」

「そうですねか？」

「うん・・・今更だけど」

「？何ですか？」

「大きくなったねえ・・・お姉ちゃんは嬉しいぞ」

胸に埋めてた顔を上げ優しく微笑んでそう言った

・・・東さん、反則ですよそれ

だって・・・

（・・・可愛すぎですよ）

ならオレも・・・

「頭よくて美人なお姉さんにこうやって抱き締められて、オレは幸せ者ですよ」

そう言い返した

「言ってくれるねえ……ありがと〜／＼」

「いえいえ……あっ、そうだ。明日からIS学園に行ってきます」

あるお姉さんをお願いされてるし

「うん、いつくんの護衛だよな？」

いつくん……オレの親友で織斑一夏って言うんだけど、ソイツの護衛をしに行くんだ

因みに言うと、先程ISを動かせる男の話があったが、一夏がもう1人の男でISを動かせる奴である

しかもそのお姉さんがついさっき言ってた一夏の護衛の依頼者、織斑千冬さんである

千冬さんは東さんの同期にしてISの大会、『モンド・グロツン』で優勝を飾った事で有名である人物だ

「そうですね……まあ生徒として、ですが」

「まあその方が幾分か動きやすくなるからねえ」

何を言ってるんだ？と思ってる方もいると思うが、まあその内説明しよう

・・・それにしても

「一体いつまでこうしていればいいんですか？」

そう、さっきからずっとぎゅってしている状態だ

流石にそろそろいいだろうと思ってくる頃合いだろう

「うーん・・・ずっと」

そう笑顔で言い切る束さん

・・・まあいいか

束さんのこんな嬉しそうな顔、偶にしか見ないし・・・

オレは束さんの気の済むまでぎゅってし続けた・・・

あれから一時間後、オレは漸く解放された

時間は丁度日が沈む時間帯だった

「お腹すいたな」

「たくこの人は・・・」

「何をご希望ですか？」

「ん〜・・・久々にオムレツがいいなあ」

ふむ、オムレツか

「了解、デザートが一品付きますが何にしますか？」

「しいくんお手製のレモン風味のレアチーズケーキがいい！」

即答かい

そして随分と凝った物ばっかだな

「飲み物はどうします？」

「アイスコーヒーでお願いしますね」

アイスコーヒーっと・・・ケーキ冷やす時間除けば40分くらいつて所か

まあ材料はあるらしいし、問題ないか

オレは住居スペースにあるキッチンに途中までだが東さんに行った

「じゃあ作り終えるまでゆっくりしててください」

「はい」

東さんはリビングにある椅子に座って持ってきていたノートパソコンをいじり始めた

オレはキッチンに来るとまず手を洗った

(さて、んじゃ作るとしますか)

オレは手際よくリクエストされた料理を作っていた

約一時間後、とりあえず今冷蔵庫で冷やしているケーキを除けば完成した

オレはオムライスをお皿に盛り付けてそれを東さんが待っているテーブルまで運んだ

「お待たせしました」



そう言って持ってきた料理を並べた

因みに栄養の偏りすぎは控えようということでもサラダを今回付けて見ました

だがサラダでも今回はシーザーサラダだ

我ながらかなり凝ったと思うよ

「おお、相変わらずしーくんのスキルは凄いね」

束さんは目をキラキラさせている・・・まるで子供だな

「あ、ちょっと待ってね」

そう言うと束さんはノートパソコンの電源を切るとそれを空いている隣の椅子に置いた

「それでは頂きましょうか」

「そだね、それじゃあ・・・」

「いただきます」

やはり日本人は食べる前に感謝の意味を込めて言うべきだと思う・・・  
いや、国に捕らわれないでやはり全人類だろうか？

オレは料理に手をつけないで東さんが食べる所を見ていた

「ん〜！やっぱりしーくんが作った料理は美味しいな〜」

にぱーと幸せそうな顔をしていた

・・・ホツ、良かった・・・

「ありがとうございます」

「いやいや、お礼を言うなら私の方だよ・・・ありがとうね」

「・・・はい」

それからオレと東さんは食べながら楽しい一時を過ごした

翌朝、オレはポストンバックを片手に束さんと今暫くの別れ話をしていた

「じゃあしーくん、ちーちゃんによろしく伝えといてね」

「了解」

「後いっくんとマイシスターの件、私からもお願い」

「分かってますよ・・・では、行ってきます」

そう言つとオレは束さんに背を向けて歩きだした

「行ってらっしやーい」

後ろで手を振っている束さんを背にオレは歩き出した

目指すは日本にあるIS学園

年下の相棒・・・織斑一夏の元へ・・・

## 序章：始まりの風（後書き）

どうも初めまして、いつきといたします。

小説を執筆するのが初めてなので色々至らない点がありますがよろしく願いたします

感想、指摘などありましたら願いたします

第一話：初陣に吹く風（前書き）

皆様、お久しぶりです。約三週間もの間を開けてしまい申し訳ありませんでした

さてさて、では、どひどひ

## 第一話：初陣に吹く風

・・・さて、東さんの元を離れて数日が経ち、ようやく日本入りした訳なんだが・・・

「どっだよ・・・」

何か訳の分からないところに来ていた

周りが森林に囲まれていて、道路一本道を現在歩いているんだが・・・  
はて？

・・・とりあえずは富士山がかなり近くに見える

地名はリンゴや巨峰で有名ならしい

後は湖が幾つかある・・・

( I S 学園ってこんな山の中にあるのか？ )

だとしたら随分と迷惑である

現に日本入りしてから既に四時間は経っているが一向に着かない・

こっちは長旅で疲れてるのに・・・勘弁してほしい

「とまらないスピードで、想いがあふれていく」

と急に着信音が鳴った

ってかこの着信音は・・・

「・・・お掛けになった番号は現在使われていないか、電波の届かないところ」

『ほう、随分と偉くなったものだな、この私をコケにするとは』

「出来心でやりました、すいませんでした」

と、即謝った



「お久しぶりです、千冬さん」

『ああ・・・所で神崎、今何処にいる？』

電話の相手は千冬さん・・・一夏の実姉でオレも昔お世話になったお姉さんである

また、一夏護衛の依頼人でもある

・・・てか何処にいらつて言われても・・・

「それが分からないんですよ」

『分からない？』

「ええ、近くに富士山が見えて、リンゴや巨峰が名産地らしいのと、湖が幾つかあるらしいんですが・・・IS学園は随分と山の中にあるんですね？」

『・・・・・・・・・・神崎、お前がいるのはきつと山梨だ』

・・・・・・・・へっ？

「山梨・・・？いや、だってちゃんと方向は合ってたはず」

『・・・ハア、いいか神崎。IS学園はそもそも山の中にはない、海に囲まれているんだ』

・・・そうだったか？

『・・・地図を添付してやるから急いでこい』

「・・・ありがとうございます」

そう言って通話を切った

その後もものの三十秒で千冬さんから学園の地図データが送られてきた

・・・・・・ハア・・・

確かに千冬さんが言った通りだったよ

何故か知らないがオレは山梨に来ていたみたいだ

現に地図とGPS機能で確認をとった

・・・と、ここまでくれば分かる通り、オレは極度の方向音痴らしい気がつかない内に目的地とは反対方向に行ってしまうという傍迷惑なものだ

何度か行ったことのある場所なら分かるのだが、行ったことのない場所や一度だけしかない場合は必ず迷って迷子になる・・・  
早く治さなくてはいけないのだが、どうもなあゝ

・・・まあそんな事はこれからの課題とするとして、だ

「もう歩くの面倒だから飛ぶか・・・駆けるぞ、黒騎士」

そう言っつて首に掛けている銀色のペンダントを掴んだ

するとそこから光が溢れ出した

これがISを起動するとき起こる現象・・・と言っつてもいいだろう  
その光は膨張するようにオレの体を包み込む

それから一秒にも満たない時間で光が弾けた

そこから出てきたオレの姿は黒く所々に赤いラインが入った機械の鎧を身に纏っていた

腕を覆うアーマー、左腕には変形機能を持った盾が装備されている

また背部には推進機スラスターや背部浮遊部位アンロック・ユニットなどは搭載されておらず、かなりシンプルな機体になっている

メイン装備が剣の類・・・ガンブレードだけ

ここまでくると、黒騎士と言う名に相応しい機体だとオレは思う

・・・さて、展開したことだし、IS学園までひとつ飛びますかね

オレは黒騎士にレーダーや黙視では感知されない特殊迷彩を付加して高速でIS学園に飛んで行った

千冬side

ハア、全くアイツは相変わらずだな

・・・にしても

(どうすれば成田から山梨に行くんだ?)

やはり迎えを寄越すべきだったか・・・いや、嘆いていても仕方ないか

兎に角今は目先の事に集中せねば

「織斑先生、どなたに連絡されていたんですか？」

現在学園の第三アリーナの管制室にいるんだが、物思いに考え込んでいたら隣の方でそう誰かが話してきた

緑の髪に幼さが残った顔立ち、服はサイズが合っていないのか弱冠だぼついていて、少しずり下がったメガネを掛けている女性で私の同僚であり、副担任の先生だ

「ああ山田君。いやなに、これからこの生徒になるやつと連絡を取っていたんだよ」

山田真耶先生

上で述べたとおり、私が受け持っているクラス、一年一組の副担任だちなみに備考だが、上下どちらから読んでも同じという面白い名前  
の持ち主だ

「えっ？この生徒って・・・転入生ですか？」

「ああ。今度来る奴は私の知り合いでな、なかなか頭の切れる奴だ」

あの極度な方向音痴を除けば・・・完璧なんだが、な

「そうなんですか、それは楽しみですね」

と、はしゃぎ出す山田君

「また転入生ですか？鳳さんが転入してきて間もないのですが・・・

」

とまた別の声が聞こえた

声のした方を目で追うとそこにはあの馬鹿にフラグを建てられた奴  
その二がいた

一応だが言っておこう

そいつの名はセシリア・オルコット。金髪縦ロールの、気品に溢れた貴族の娘だ

因みに代表候補生でもある

「そう言うなオルコット。今回は特殊なものだから仕方がない・・・  
んだが・・・」

そう、問題は

(アイツが馬鹿と同じで“動かせる者”だからな)

何が動かせるか・・・ISだ

アイツが・・・シオンが転入した事でしばらくはづるさくなるだろう

・・・今考えただけでも頭が痛い

「あつ、始まりですよ」

山田君がそう告げた

一体何が始まるのか？

それは今日から行われるクラス対抗戦だ

入学後に決めたクラス代表者同士が集まり、試合を行う・・・これがクラス対抗戦だ

因みに言うが、最初の試合は一組対二組・・・

馬鹿者・・・一夏と先程オルコットの口から出てきた「鳳」と言う



女子の試合だ

（さて、アレを教えたんだ。前回のようにつももない真似はするなよ）

アレとは何か・・・それはアイツが使えば分かる

私はそう思いながら管制室から始まる試合を見ていた

一夏side

「鈴、お互い持てる力を全力で出そうぜ！」

「そうね！コテンパンに叩きのめしてあげるわ！」

とまあ競技場でISを展開して俺達はそう言い合った

・・・えっ？鈴といざこざはなかったのかった？

んなのあるわけないだろ？

そりゃあ鈴が転入してきたのには驚いたし、嬉しかったさ

だけどそれだけだ

まあ喧嘩はする事なかったし、至って仲のいい友人って感じで過ごしてたからな

「そうだ、一夏は知ってる？ISの絶対防御も完璧じゃないのよ。シールドエネルギーを突破する攻撃力があれば、本体にダメージを貫通させられる」

絶対防御・・・まあ操縦者が死なないようにするための能力・・・

と言えはいいか

ただこれはシールドエネルギーを使つての能力だから極端に消費する

だから出来るだけ致命的な攻撃は防がなければならない

俺の場合は特にそうだから、尚更気をつけなければいけないんだが・

・なかなか難しい

・・・っと、さっきの鈴が言っていたことで思い出したけど、噂では、IS操縦者に直接ダメージを与える“ためだけ”の装備も存在するらしい

もちろん、それは競技規定違反だし、何より人命に危険が及ぶ。けれど

『殺さない程度にいたぶることは可能である』

という現実は、変わりようがない

てか鈴もそうだが代表候補生クラスはそれがおそらく可能なんだろう

・・・そう考えると

(よくセシリアと渡り合えたよな)

結果的には負けたけど、な

『それでは両者、試合を開始してください』

開始の合図を示すブザーが鳴ったとき、俺達は駆け出して行った

一夏side out

鈴side

ブザーが鳴った直後、あたしと一夏は急接近した

まあ先手は

(もちろんあたしだけど…ねっ！)

青竜刀…とは若干かけ離れてる刀剣を一夏目掛けて斬りつける

だけど一夏は手に持っていた雪片式型で防いだ

・・・へえ

「初撃を防ぐなんてやるじゃない・・・けど」

そこで区切ってもう一つの武器を呼び出し（コール）をした

呼び出したのはさっき一夏を斬りつけようとした刀剣、実はこの武器グリップの所で連結出来るの

あたしはその二刀をくるくると回した後、再び一夏に急接近した

「ハアアアアッ！」

まずは右斜めに振るう・・・けど雪片でガードされた

なので機体を斜めに回転して左斜めから斬撃を浴びせた・・・けどそれも防がれた

だから一旦後退してグリップを連結させる

連結した両刃刀をバトンのように回し、脚部に配備されているブー  
スターで一夏を突くように接近した

「うおっ!？」

・・・これもかわすんだ

一夏って確か搭乗時間はそんなになかったはず・・・普通ここまで  
動けるものなの？

・・・っと、今は試合に集中しなきゃ

あたしはそこから一夏の動きを追いながら回転切りなどをして攻撃  
した

だけど一夏はかわし続ける

少しの間それをし続けていると一夏は一旦距離を置くように後退した  
恐らくは態勢を立て直すため

だけど

「甘い！」

そう言うとシエロン甲龍の背部アンロゼックユニット浮遊部位、龍砲を稼働させる

両肩の一部がスライドして開いた

その後中心の球体部分が光った瞬間、一夏は目には見えない何かに殴りとばされた

「今のはジャブだからね」

そう言って一夏に不敵な笑みを浮かべてみせた

じゃあここで質問

シヤレ牽制の後には一体何がくるのでしょうか？



ヒントはボクシングに近い・・・かな？

・・・はい、じゃあ正解、答えは本命<sup>ストレイト</sup>

と、言うわけで！

もう二発・・・喰らいなさい！

両肩の球体部分がまた光り、一夏は地表に打ちつけられた

さて、あたしのIS、甲龍に装備されている龍砲……感のいい人は気づいてるんじゃないかしら？

この龍砲……実は衝撃砲なの

衝撃砲とは空間自体に圧力をかけて砲身を生成して、余剰で生じる衝撃それ以外を砲弾化して撃ち出す代物

ただこの龍砲は砲身がなく、射角制限がが全くない、いわば全方位に撃つ事が出来る優れもの

さらに、龍砲は砲弾も見えない、燃費が他のISよりも優れているという点もあるの

あたしは右目に照準カーソルを展開して白式に狙いを定めて衝撃砲を撃った

着弾する前に一夏は左に走ってかわした

たて続けに10発近く放つがごとごとく避けられた

「よくかわすじゃない。衝撃砲《龍砲》は砲身も砲弾も目に見えな

いのが特徴なのに」

あたしは先程からかわし続けている一夏に賞賛の言葉を贈った

対する一夏は疲れてるのか若干息切れを起こしている

まあ無理もないわね

自分で言うのもなんだけど、結構攻めたから

それを一夏は防戦一方で防ぐか、或いはかわして攻撃を受けないようにしてたし・・・

42

「・・・鈴！」

「何？」

「本気で行くからな」

へえ、かわすことで精一杯なやつが？

「当たり前でしょう？格の違いってのを見せてあげるわよ！」

あたしは両刃青竜刀をバトンのように一回転させて構え直す

それで一夏がいつ攻めてきても問題ないように集中し、龍砲を撃てる状態でチャージを完了しておく

(・・・今！)

機を見計らって衝撃砲から発射した砲弾が一夏の操る白式へと飛んでいく

だけどそのモーションを見計らっていたのか、一夏が急速接近してきた

しかも先程までの白式の数値とは比べ物にならないくらい

言うなら瞬間的に加速する・・・イゲンツション・ブースト瞬時加速・・・かな？

てか

(回避が間に合わない!?)

そう思つて次期に来るであろう衝撃に備えた

一夏の振りかざした雪片があたしに振り下ろされそうになった時

ズドオオオオンツ!!

「「!?!」」

マズイ、敵に見つかった……!?

……じゃなくて!

突然大きな衝撃がアリーナ全体に走った

ステージ中央からはもくもくと煙が上がっていた

……どうやらさっきの衝撃は何かのアリーナの遮断シールドを貫通してきたみたいね

今の状況を冷静に、かつ迅速に判断すると・・・!?

「一夏、試合は中止よ!すぐにピットに戻って!」

今ので混乱している一夏にあたしはプライベート・チャンネルでそう告げた

その後にISのハイパーセンサーが緊急通告を行ってきた

“ 警告、ステージ中央に2つの熱源を感知。所属不明のISと断定。内一機にロックオンされています”

・・・マズい、あたしもそうだけど、もう片方のIS、完全に一夏をロックしてる

しかも遮断シールドを軽く突き破るほどの威力

ちなみに説明するとアリーナの遮断シールドはISと同じもので作られている

つまりよ、そんな威力を持った攻撃が一夏やあたしに被弾したら一撃でお陀仏ってわけ

いくら絶対防御があるからといってもアレはマズい

そういうレベルなの

・・・そんな事考えただけでもゾツとするわね

でもあたしは仮にも代表候補生、みんなの安全を確保出来るまで逃げられない

稼働時間が学園最下位の一夏も他の生徒と同じで逃がさなくてはいけない

だから

「一夏、早く！」

「お前はどつするんだよ!?!」

・・・ああそうか、プライベート・チャンネルまだ使えないんだっ

け？

・・・えっ？何それって・・・文字通りの意味、秘匿回線と言った方がいいかしら？

まあ聞かれたくない内容がある場合はその秘匿回線を使った方がいいわけ

まあ今はそんな事はさておいて

「あたしが時間を稼ぐから、その間に逃げなさいよ！」

「逃げるって・・・女を置いてそんな事出来るか！」

「馬鹿！アンタの方が弱いんだからしょうがないでしょうが！」

分からず屋にそう言った

一夏はその言葉にたじろいでいた

「別に、あたしも最後までやり合うつもりはないわよ。こんな異常



事態、すぐに学園の先生達がやってきて事態を収拾  
「

だけどの時あたしは集中力が欠けていたから気付かなかった

「鈴！前っ！」

「えっ？」

一夏に言われて前を見た

するとそこにはあたしに向けて極太ビームを放っていた所属不明の  
IS二体がいた

（あっ……………死んだ）

そう思ったらふとアイツの顔が頭の中に浮かんできた

（…………シオン…………）

小学五年生の時にあたしと同じ日に転校してきた男の子

・・・今更だけど

(アイツ、今何やってるんだろっ?)

私が今死にかけてるのに対してアイツは・・・きっとどこかで迷子になってるんだろっな

だってアイツ、昔っからよく迷子になるし

あたしはアイツとの初めて出会った頃の事を思い出していた

当時のあたしは転校して間もない頃からクラスの男共からイジメにあっていた

イジメの内容は名前からだった

『鈴音・・・パンダみたいな名前だな』

この一言からだった

これを聞いた男共はからかう感じでみんなして『パンダ、パンダ』とあたしを指して連呼した

「あたしはパンダなんかじゃないもんっ！」

悔しかった

周りからそう呼ばれて

だけどその時・・・

「情けないなお前ら、寄ってたかって1人の女の子をイジめるなんて」

そう言ってソイツは言い寄ってきた

「大丈夫か？」

あたしはソイツに頷いた

『何だよお前、転入生のクセに生意気だな』

そう、ソイツはあたしと同じ日に転校してきた男の子だった

「生意気で結構、少なくとも集団でイジメてるお前らよりはマシだとオレは思ってるけどな」

『な、何だと!?!』

『ふざけるなっ!』

『こんな奴、やっちまえ!』

そう言って男共は一斉にソイツに向かって殴りかかった

「あっ、危ない!」

あたしは必死にそう叫んでいた

何せ殴りかかったのは1人2人でなくあたしをイジメていた集団の

6人全員だったのだから

だけどソイツはそんな事にも動じず体を捻ったりするだけで殴りかかってきた男共の攻撃をかわしていた

で、極めつけにはみんなの額にデコピンを一回ずつしていた

それをやられた男共は額を両手で抑えて呻いていた

・・・どんだけ痛いんだろう？

そう思った瞬間でもあった

「この子は今オレがお前らにした事以上に痛かったはずだ」

『痛かったって・・・俺達殴ってないぞ!?!?』

「馬鹿かお前らは・・・心がだよ」

・  
・  
・

「お前らだつて自分の親がつけてくれた名前を馬鹿にされるのは嫌  
だろ？それをこの子は受けて心が痛んでるんだ」

『  
・  
・  
・  
』

ソイツが言った事が理解できたのか、みんなは申し訳なさそうな顔  
をしていた

するとあたしをイジメていた男共はあたしの前に来た

『  
・  
・  
・  
悪かった』

大将みたいな奴が謝ってきた

『  
ゴメン』

『アイツの話を聞いて同じ事されたら・・・と思ったら・・・俺からもコメント』

・・・しょうがない

「・・・いいわよ、もう」

反省してるなら、とついそう思っていた

男共は謝った後みんな家に帰っていった

「よかったな、これでイジメの件はなくなるぞ」

機を見計らっていたのか、助けてくれた男の子はそう言った



「うん・・・ありがとう」

「お礼を言われる程でもないよ」

謙遜しなくてもいいのに

「・・・知ってると思うけど自己紹介するわ、あたしは鳳鈴音」

「鈴音・・・いい名前だな」

「・・・えっ？」

名前を誉められるとは思っても見なかった

さっきまで名前の事で馬鹿にされていたのに

「日本読みすると鈴の音・・・いい名前だと思うぞ？」  
「両親に感謝しなきゃな」

とソイツは笑顔でそう言った

・・・ぐすっ

「うえっ！？何で泣くんだった！？オレ何か言ったか？」

違う違う・・・

「ゴメン、・・・いっつ、名前になって・・・嬉しかったからっ」

「・・・よく頑張ったよ」

そう言って男の子は頭を撫でてきた

そう言われてあたしはわんわん泣いた

「・・・ありがとう、お陰でスッキリしたわ」

アレから約十分後、落ち着いたあたしは何も言わず慰めてくれた男の子にそう言った

「そうか・・・あっ、つい忘れてたけど、神崎シオンだ。よろしくな、鈴」

「・・・鈴？」

「親しみを込めて言ったんだが・・・嫌だったか？」

そう言って申し訳なさそげな顔をする

・・・これじゃああたしが悪いみたいじゃない

・・・それにしてもー

(親しみを込めて・・・か)

そう言ってくれたからか、悪い気はしなかった

むしろ嬉しい気持ちでいっぱいだった

「悪くないわね・・・よろしくね、シオン」

「おう・・・そうだ鈴」

「？何よ」

「何か困った事があったらオレを呼べ。助けに行くから」

・・・何か

「まるでピーローものね」

「・・・言ってる」

そう言って顔を背けた

・・・馬鹿ねえ

(アンタはもうあたしのヒーローなのに)

だけど1つ訂正、ヒーローじゃなくて・・・

(白馬に乗った王子様よ／＼)

あたしからしてみればね

それとそう言ってもらえてすっごく嬉しかったんだから

だから

「分かった。じゃあもしあたしに何かあったら助けに来てね？」

「・・・ああ！もちろん」

そう言って彼はあたしに微笑んだ

・・・それから隣のクラスの一夏と友達になって、中学二年生の頃まであたし達は一緒にいた

その後はちよつとした事情で国に帰っちゃったけど、アイツ・・・シオンとはそれ以来一度も会っていない

手紙のやり取りは頻繁にしていたけどね

(シオン、あの時の約束が本当なら助けに来てよ！)

無駄とと解っていてもそう思わずにはいらなかった

あたしを助けてくれた王子様なんだから

だから

(助けに来てよ、シオンツ！！)

その心の中で叫びながら直に襲うであろう衝撃に備え、あたしは目を固く閉じた

……だけど衝撃は来なかった



変わりに来たのは・・・誰かに抱きかかえられて急加速した感じの  
衝撃だった

(誰?一夏?)

そう思って堅く閉ざしていた目をゆっくりと開けていくと・・・  
・えっ?

「ウソ・・・」

「嘘じゃないよ・・・大丈夫か?」

あたしはその声に頷いた・・・じゃなくて!?

「そうか、そりゃあよかった」

ソイツは安堵した顔でほつと軽く溜め息をついた

「・・・本当に、来てくれた」

「オレは言ったはずだぞ？困った事があつたらオレを呼べ、助けに行くから・・・ってな」

そう言つてあたしに微笑んだ

・・・やっぱり

(アンタは白馬に乗つた王子様よ)

あたしが初めて好きになつた人

初めて逢つた時から助けてくれた・・・そこから一緒にいることで段々と彼に惹かれていったのよね

・・・極度の方向音痴なのが玉に瑕だけど

「久し振りね、シオン」

「ああ、鈴も元気そうで何よりだよ」

肩まで伸びた銀髪に紅い両目、白馬に乗った王子様……ではなく、黒い騎士を思わせるかのようなISを身に纏ったあたしの意中の人、神崎シオンはそう言った

## 第一話：初陣に吹く風（後書き）

いかがだったでしょうか？

とりあえず鈴はオリ主にしてみました

今回は本格的に戦闘に入りたいと思います

また今回オリ主のISに触れましたが、感じ的には「魔法戦記リリカルなのは Force」の主人公、トーマ君の戦闘服、というかまんまにしてみました

次に武器ですが・・・ここは次回本編で出しますので今しばらくお待ちください

ではまた次回お会いしましょう

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2234s/>

---

IS インフィニット・ストラトス ~黒風の騎士~

2011年10月8日23時55分発行